

## 看護大学生への口腔ケア教授法の検討： 口腔への関心と口腔セルフケアの取り組みを踏まえて

桑村由美, 岸田佐智

徳島大学大学院医歯薬学研究部

### 1. はじめに

保健師助産師看護師法の中で、看護師の業務は「傷病者もしくは褥婦の療養上の世話または診療の補助」と定められている。口腔ケアは「療養上の世話」に含まれる項目である。看護師教育の中では、多くの教科書で「日常生活の援助」の中の『身体の清潔』の項目の中の一部として位置づけられている。著者らはこれまでに、看護大学生が臨地実習で体験したと認識している口腔ケアの実践内容の経年比較を行い、教育の課題を検討し、口腔ケアの基盤となる口腔アセスメントに関する教育の検討の必要性を報告した<sup>1)</sup>。現在の看護教育では、看護師の質保証に向けて、学生の学修準備状況に合わせた効果的な教授方法の検討が重要である<sup>2)</sup>といわれている。そこで、本研究の目的は、看護大学生の口腔への関心やセルフケアの取り組み状況に焦点をあて、口腔ケアの教授法の検討を行うことである。

### 2. 方法

1) 対象：看護基礎教育課程を4年制のA大学で教育を受けている4年次学生  
2) 調査時期：2018年7月下旬  
3) 調査方法：自記式質問紙調査。本研究の目的を説明後に調査用紙を配布し、協力が得られる場合には回収箱への投函を依頼した。  
4) 調査項目：先の研究で用いた質問項目（臨地実習で体験する全ての領域の対象者の状況を想定して作成。自分の口腔セルフケアの実施状況、現在の口腔内の状態と歯科受診・受療行動、口腔への興味・関心・知識、臨地実習での口腔ケアの体験と自己評価）。なお、本報では、口腔への関心・知識・認識（とてもある（4点）から全くない（1点）のリッカートスケールで回答）とセルフケアの実施状況（ありを1点、なしを0点で集計）に

焦点をあてて報告する。

5) 分析方法：個人属性の基礎集計と各変数の記述統計量の算出した。口腔ケアの関心や知識・認識と口腔セルフケアの2群間の関係をみるために各項目の合計得点を算出し、Spearmanの順位相関係数を算出した。統計ソフトはIMB SPSS 23.0 for Windowsを用いた。

6) 倫理的配慮：本研究への参加は自由意思とし参加の有無により学習や成績評価に何ら不利益を生じないこと、無記名で行い、集計結果は統計的に処理し個人が特定されないように配慮すること等を口頭および文書で説明した。なお、本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2329）。

### 3. 結果

#### 1) 対象者の概要

71部配布し、64名（回収率90.1%）より回答が得られ、同意が得られたのは63名（88.7%）であった。対象者の年齢は21.5±1.2歳（平均値±標準偏差）であった。

#### 2) 口腔内の状態

痛み10名（16%）、歯磨き時の出血19名（30%）、喫煙1名（2%）であった。

#### 3) セルフケアの取り組み状況

##### ① 口腔衛生行動

口腔内の観察56名（89%）、歯間ブラシの使用23名（37%）、フロス16名（25%）、丁寧に歯を磨く51名（81%）、歯と歯茎の境目を磨く55名（87%）、歯ブラシを常時携帯15名（24%）であった。

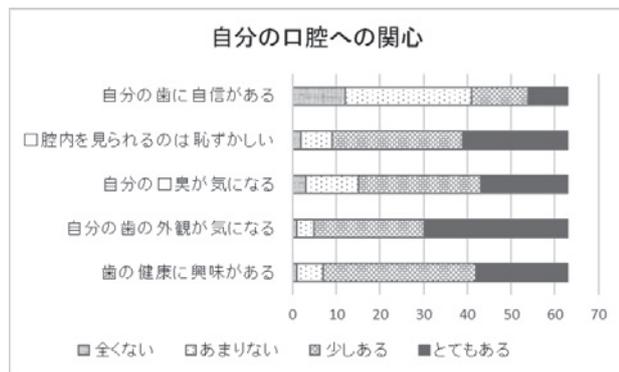
##### ② 歯科受診受療行動

1年に1回以上の歯科健診27名（43%）、大学での歯科健診22名（35%）、歯列矯正の経験19名（30%）、過去1年以内にう歯の治療を受けた

26名(41%)、かかりつけ歯科医院がある43名(69%)、歯磨きの指導を受けた経験37名(59%)であった。

#### 4) 自分の口腔への認識・関心

自分の歯を他者から褒められた経験がある24名(38%)であった。口腔内を見られるのは恥ずかしいと思うのは54名(86%)であった(図)。



#### 5) 口腔ケアへの知識・関心・認識

義歯の保管方法は23名(37%)が「全く知らない/あまり知らない」と答えたが、口腔ケア実施時の誤嚥への注意や経口摂取をしないときにも口腔内のケアが必要であることや口腔ケアと全身疾患の関連等ほとんどの知識について80%以上の学生が「知っている」と答え、ほとんどの学生が口腔ケアの必要性を認識していた。

6) 口腔への関心とセルフケアの取り組みの関係  
口腔への関心得点とセルフケア得点が有意に関連していた( $r=0.336, p=0.007$ )。しかし、セルフケアと口腔ケアの知識・認識・関心には関連がみられなかった。

#### 4. 考察

平成28年度歯科疾患実態調査と比較すると、出血(20-24歳女性は36.1%)は大差はなく、デンタルフロスや歯間ブラシの利用(22-24歳女性は22.9%)は高率であった。歯科検診の受診(43%)は平成28年度国民健康・栄養調査(20-29歳女性は48.3%)と比較するとやや低かった。大学での歯科検診は無料で専門家の検診を受けられる機会であるため、周知勧奨する必要がある。口腔や口腔ケアへの知識や関心は高いため、自分の口腔内をより良い状態に保つための具体的な方法(自分で行うセルフケアと専門家の援助を受けるプロフェッショナルケア)を知識として教授

することで、行動として結びつきやすいと考える。今回の調査では、口腔への関心が高い学生の口腔セルフケア得点が高く、関心が高いほど行動が伴っていると考えられた。しかし、他者への「口腔ケア」得点とは関連がみられなかったため、看護専門職としての視点を強化する必要性が示唆された。また、85%以上の学生が口腔内を見られることを恥ずかしいと感じ、90%以上が自分の歯の概観が気になり、75%以上が口臭が気になると答えていた。平岡ら<sup>3)</sup>の報告でも、口腔ケアの体験型学習で患者役、看護師役の双方の体験で「羞恥心への配慮」の必要性が述べられている。患者を対象にした調査<sup>4)</sup>に「排泄の援助」「口腔ケア」は羞恥心が強く看護学生から受けたくない援助という報告もあり、実技指導の際には援助の対象者がなぜ、口腔内に羞恥心を感じるか、個別の背景への配慮も加味しながら正確な知識と技術の教授法の工夫の必要性が示唆された。

#### 5. 結論

学生のセルフケア実施率は同年代の成人よりもやや高率で、口腔や口腔ケアに対する関心も高かった。学生の強みを活かしながら、羞恥心等の個別の背景にも配慮し、口腔ケアの正しい知識・技術が習得できるように教授法を工夫する必要性が示唆された。

#### 6. 引用文献

1. 桑村由美 他：看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の経年比較 平成29年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集 16-17, 2018
2. 斉藤しのぶ他：概説 看護学教育モデル・コア・カリキュラムのねらいと活用, 看護教育, 59(3), 214-221, 2018
3. 平岡葉子他：口腔ケア体験型学修による学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 9(2), 11-17, 2009
4. 早川真奈美他：看護実習生の受け持ちに関する患者の意識調査, 日本看護学会論文集：看護教育, 47, 131-134, 2017.